



年頭所感

21世紀への発想

池田悦治*

あけましておめでとうございます。

新年といえば、何となく落ち着いて、静かな心境の中で、過ぎ去った日をふり返りながら、未来を想うのが、わたくし共長年の風習であったように覚えます。ところが、近年はすっかり様変わりしまして、旧年と新年との感覚が余り区別出来なくなりました。

文字通り、革新又革新の技術によって、わたくし共の生活が大きく変質し、万事にせわしく春夏秋冬の四季を友にする心のゆとりを失い、新たな情報を先取りするのに明け暮れているからではないでしょうか。

これが近代文化であり、先端生活なのでしょうから、殊更に曆を立てて、「年頭所感」などは、随分おこなっているような気がします。

然しながら、これほどに花形の科学技術も、時に道を外して、とんでもない誤りを惹き起こします。核など科学技術のおごりのようですが、こんなことを反省してみる機会を持つのも意義のあることだと思います。

この際、先人文化の所産「曆」に戻って、折角われわれのなじみ深い新年をかみしめながら新たな抱負をつくってみます。

今世紀の終盤から、特にやかましくなった科学技術の在り様についてであります。

20世紀人が最も誇る科学技術が、これ程能率的で合理的な技術文化をつくりながら、半面にわれわれの生きる自然条件を損いつつあることの自覚であります。このままではいけばわれわれは人類が生きる唯一の場、「永遠の地球」を、自らの手によって破滅に導くの

では、との懸念であります。

賢明な現在のひとびとは、これを配慮して、技術革新の傾向を模索しています。

過日開かれた朝日新聞社の国際シンポジウム「21世紀へのメッセージ」で世界の識者達は、挙って、20世紀がこのまま進むことを憂え、何とんでも、この風潮を「抑制」しなければならないと主張していました。

このシンポジウムに関して、朝日の天声人語は、20世紀人は、いかなる形の「抑制の思想、抑制への技術」を創造して、21世紀人に伝えうるかを深く考えさせるシンポジウムだったと評しています。

わたくしは、数年前「技術と思想」の表題で小論し、OECDが「日本は、自然科学と法学偏重の教育を改めて、哲学や一般社会科学の教育に重点を置くべきである」と指摘していることに触れ、科学技術の研究にも、やはり「思想」の大切なことを訴えているのだと結んだのを想起します。

これからも、科学技術は益々進歩の度を速めるでしょう。ひとびとは、この恩恵をうけて、幸せでなければなりません。それには、もう一つの社会科学や哲学の上に「心」をも加えて、調和のとれた社会を築かねばなりません。更に遠いわれわれの祖先達が、連綿として、細心に自然を愛し、尊び、自らの生存条件を守り通してきた偉大な哲理に学び、科学技術の方向を正しく見つめ、人類永遠の幸福のために「科学する人々の哲学」を今一度、の機会としての新年、こんな新年を発想いたしました。

*池田悦治 (Etsuji IKEDA), 社団法人生産技術振興協会理事長